

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
8月号
通巻552号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



夏、桃と健瓠(たける)と琉球藍 屋久島 手塚田津子さん絵(文・8頁)

平成6(1994)年8月23日 月次祭法話より

大倭の節目の年に — 立教開宣五十年

法主 矢追日聖 (満82歳)

転換のつねり

今年の八月は何か知らんけれども忙しい月でした。大倭の節に当たっておりますので、(※十五日に立教開宣五十年記念祭、『天倭神宮伝承の紀』出版)、現界が節であれば霊界もやっぱり動きに節があるんですね。私個人にしましても、嬉しいことも悲しいことも、色んなことがありました。

この間は、創作集団「えん」の皆さんが、長曾根日子命の顕彰運動と言いますか、そんなことをしてくれましたね(※五月二十一日、拜殿において創作舞踊「加美想望」上演)。はるか大昔から霊界の人達の待っておったものが、今、その時期がきた、ということですね。

八月十五日は終戦の日ですが、これは負けるための戦さだと霊界から予言されてきました。負けることによって、それまで社会や国の中央におった武力権力者がいなくなつて、神と人が一つになるような時代のきつかけになるんだ、と。過去において闘争的な、平和を欠くことを色々やってきた罪障というものがだんだんと無くなつていき、みんな幸せに暮らせる社会になるように大きく転換していく、今、その時期なんです。

二十一日は東光大祭で二日ちがうだけです。それから、その時と内容は同じ、ちょっと変わっておりますが、今日の月次祭の時に霊界を見ますと、何かそのうねりというのがあるんですね。

真正面に長曾根大王が出て来ています。神代時代のような白い礼服です。これはもう神武天皇が九州から出て来た三千年程前のこの大王さんやから、何万年も前というようなそんな古い時代とちがうんですけれどね。裾は括ってあって、袖口に鈴が付いていて動いたら音が鳴るといような礼装ですわ。それから神武天皇も出て来られてます。大倭神宮であれば、大先祖・ご先祖さんら百七十二年前からの神さんが居るからね、長曾根大王やの神武天皇はずーっと奥の方やからなかなか出て来られないですよ。ところが今日は真正面に二人が出て来てました。

今まで埋もれておったことを、私を通して世の中に出してくれているという感謝のね、お礼に出来ました。そうしたらね、こう涙が出てものが言えなくなってくるの。まあ皆さん方には分からんかて私一人が分かるとつたらよろしいんやけどね、長曾根大王にスマンと思って、言葉として、言霊に出してあります。神武天皇がなんぼ日本の皇族第一代と言っても、霊界に行った時には長曾根大王の下に居てはります。格が違うんです。やっぱり長曾根大王の次が神武天皇というように移ってきた形にね、なっているんです。

聖歌についての話

聖歌「くにものもと」というのは神武天皇の言霊でございませう。九州から出て来た人が大倭の婿養子になってしまい、第一代のスメラミコトになった時に、大倭に全面的に頭を下げて低姿勢で従ってきたという、神武天皇の本当の心なんです。ご先祖さんからの流れを見て、ここが本当の「くにものもと」だとおっしゃった。そういう意味を心でよく汲み取って歌ってほしいと思います。

今言うように「くにものもと」は、神武天皇が伝えてきておる言葉なんです。だいたい亡くなった私の家内(※妙月かあさん)が神憑りでね、口に出てくるのを自分で記録しておるんです。聖歌と言うから歌と思ってるけど、本当を言うとお経と同じことなんです。仏教の場合、お経の始めには「如是我聞」と書いてます。お釈迦さんの弟子達が「私はこう聞きました」というようにして出てくるのがお経なんです。

もう一つの聖歌の「黎明大倭」というのは、長曾根大王が私に対して霊示で伝えてこられた歌なんです。五番までありますが、最後に「昭和維新の比登柱」という言葉があります。これはね、「比登」というのは人の意味ではなくして、「比」は霊界、「登」は現界の意味です。結局、神と人が一つになること、言い換えると霊界の人達と現界の我々と、対々の形において交流していくことによつて本当の平和が出来てくるという意味なんです。そのために大倭が昭和の時代に生まれていますので、昭和維新という言葉になったんやと思います。長曾根大王も古い人やけれど、現在の時代を考えているんやわな。

まあ聖歌にもそれなりの何かの曰く因縁が付いているという話です。

それでね、あそこに(※拜殿の壁)、長瀬さんという人が書いてくれた額がありますが、あれは倭姫さんが私に直接くれた歌なんです。確か倭姫さんがそう言われたと思うんで、「みいず」という題を付けてます。崇神天皇の娘さんで、天照大神の御霊をさげて大和から外へ出て伊勢まで行つたお姫さんです。斎宮の最初でしょうか。

この前も伊勢に行くことがあった時、倭姫のお宮さんが作ってあったから、そこへ挨拶に行くのと、「ここは自分の本地(日本当の場所)やない、私

は大倭におりますよ」と言われてね、笑ったことがあるんですよ。私個人とどんな因縁があるのか知らんけれども、終戦の時からいつでも付きまとうようにしておられるんですね。それを長瀬さんが何を感じたのか知らんけれども、これを書いたらありがたいと思います。

東北に旅行して

ちょうど八月十五日には、ここで我々と一緒に生活して色々あった、平山久という男が亡くなりました。そのお別れの会を二十七日にしてやろうと思つてます。

それにまた東光大祭の明るる日、昨日ですわ、ここで仲間として一緒に暮らしていた手取屋フミさんが亡くなりました。今は石川県の松任に居つたんですが、私より一つ年上やから八十四歳やと思つたんです。私は行けなかつたのですが、うちの家内と柴地(暁子)さんや他の者が車で行つてくれました。手取屋のおばちゃんはいつも自転車に乗つてね、畑作りをしてはつたので、今日ここにお供えしてる西瓜を記念に持つて帰つてくれました。手取屋フミさんが畑で作つた西瓜は、こんなに大きくなつておるけれども、作つた方はもうあの世に行つておるんです。後で切つて、皆でお供養したらいいと思うとりますわね。

ま、世の中というのは何かやっぱりね、良いことがあると悪いことがある。これ自然の流れなんです。私ももう八十三ですけれども(※数え年)、あと何年神さんが命をくれるのか分かりません。何も自分で死ぬの考える必要はないけれども、やがては消えることだけは覚悟してないかんと思つてます。だからね、たとえ一日でもお互いに健

康で長生きしたいと、そう思っております。

この間も(※五月二十六日)、一週間以上、東北の旅行をしました。高橋(良美)さんと見田(瑛子)さんが、ごつい荷物を背中にせたくうてね、ずーっと世話してくれました。それでまへ行けたんです。

その行った所、行った所に、昔、倭に居って東北へ行っている人達と会うんですね、人格霊ですから靈魂ですけども。ま、私が一番感じたのは石塔山です。青森県のどこら辺りか私はよう知らんのやけども、山坂がしんどかったですわ。うちの家内は車椅子でね、端の人が気の毒に引張ってくれました。車椅子の上で何か知らん、大きな声で「分かりました、分かりました」言うて拝んだわ。そこに沢山の磐座いわざがあつてね、その磐座が荒らされたんか知らんけれども、石がみんな散つてしまっているの。

長曾根大王は大倭で自決していますけれども、その一族が茨城の印旛沼とか関東の辺りにも定着していますし、ずっと東北の方へも行つて、最後に青森へ行つてるんですね。だから向こうの長曾根一族の代表者が出てきました。言葉では何やら族とか言うてるかしらんけどね。その土地に元からおつた人達と話し合ひして、手を結んだ場所やと思う。その土地の神さんのお祭りもするし、長曾根一族が大倭から持つて行った神さんもお祭りするという形やったと思う。神祭りによつて土地の人と仲良うしたんやね。

「さいならー」言うて帰る時の写真のプリントを見た時にね、びっくりしました。鳥居があるんやけど、ひとつの霊の光というか霊体がやっぱりものすごく出てきているんです。それは喜んで歓迎してくれた証拠なんです。

巖鬼山神社に行った時かて、何千年、何万年と

いうような大木に心靈写真の現象があつたんですよ。よくテレビで、心靈写真だと言つて人の顔のようなもの紹介しているけれども、本当の心靈写真はあんな姿やないんです。あれは影なんです。本当の靈魂の実体は、光なんです。その光にも白とか黄色とか水色とか色んな色がついております。光だからフィルムに感光するんでしょうね、肉眼では見えへんけれど。石塔山のプリントに出ているものは、もう恐ろしいほどですわ。写真はまた拜殿にも架けておきます。それは神の実体やからね。

大倭は、場所はここやけれども、この霊体と

「奈母太加天腹」とは

その根元である須佐緒命、奇稲田日女命、饒速日命が日本民族の祖先なんです。それが誰にも分らなかつた。それで、活字に印刷して皆さんの目に見えるような形にしたのが、『天倭神宮伝承の紀』です。もう皆さんの手に渡つたかもしらんけど。そして聖歌もね、神武天皇や長曾根大王の言葉だど、そういう意味において礼拝してほしいと思

います。その時ね、「奈母太加天腹」と言いますが、「奈母」というのは、本当に帰依します、従いますと祈る、誓いなんです。「太加天腹」というのは陽性と陰性が一体であるという宇宙創成の原理です(※「太」が陽性でプラス、「加」が陰性でマイナス)。大宇宙の摂理に対して絶対に従いますというのが、「奈母太加天腹」の言葉なんです。

だから、何も神さんを拝んでどうするんやという心ではなくして、自分自身が宇宙の天地自然の法則を絶対に信じます、従いますという誓いの言

葉なんです。仏教で「南無阿弥陀仏」と言つたら、阿弥陀如来さんに従いますということやしね。

自然に反することは致しませんという誓いなんだから、「奈母太加天腹」を唱えたらご利益あるとか、そんなんじゃない。なんぼ唱えたかて病気が治るもんではないけど、宇宙の理に添うたような生活の仕方をしていきますという誓いやから、そのようにしておれば結局病気になると思つた。自分が与えられた寿命だけはくれると思つても、やっぱり今のような文化生活して、夏は暑いからクーラーかけて晩に腹出して寝ておつたら、これは「奈母太加天腹」の反対をしてんねんから病気になるかてしょうがない。そら生きてる肉体を守ることが程々にしたらええ。私はウチワであおいで寝とんねん。

「奈母太加天腹」と言葉で出している以上は、大宇宙の原理に従いますということなんです。だから自分の腹で出来た子供を産んだら、これを親は育てていく、かわいがつていくというのも宇宙の原理や。親子のケンカをしとつたら「奈母太加天腹」に反してるんや。そんな風に皆さん方の日々の生活の中で理解してもらつて、大倭教としての実践なんです。修行でも何でもなし。

こうやって祭典をするのは、天地自然に対して誓いの言葉を、みんな自分の口から出しておるんです。神さんに対して何も拝んでるんじゃない、約束しているんですよ。

神さんは皆さん一人一人全部に、同じように空気を吸わしてくれてはるんや。人間関係を密にしてみんな仲良う暮らしていく。ここに出て来るのも、何かの深い縁のある人ばかりです。こうして皆集まって来るんやから、共に仲良くしてこうという気持ちで、助け合つて幸せにいくということが一番大事やと思うね。

私は社会福祉の仕事も、「奈母太加天腹」の原理に基づいてやっています。

大倭病院について

病院も作ってます。自分の不注意で勝手に病気になるってね、それを治してくれというのは、まあ神さんに反するかもわからん。あまりかんばしくないねんけど、病気になるたら仕方がない。みんなが幸せにいくためにそこは、我々人間の考え方で許してやってくれと言ってますねん。

だから大倭の病院へ来る人は、やっぱり自分は宇宙の法則に逆らっているというか、従っていない部分があるんやなと、そういう反省をせんとあかんね。

けれども、医療や医学という知恵そのものも天地自然から与えられたものやからね。犬でも猫でも自分の病気を助けていく方法を知ってんねんから。人間の医学でも同じことやわな。病気になる時は、極力、うちの病院も利用して下さい。やっぱり病院も経営ですからね。ま、これは冗談ですが。(笑)

皆さんもちよっと加減が悪かったら、すぐに診てもらったらありがたいなと思うんです。できるだけ早く早めに、やっぱり早期発見がいいんです。これは大倭の病院や、自分の病院やという気持ちで気軽に行ってください。

毎月五日には朝礼があるので、私はいつも病院の先生や職員に話をしてますから、患者をできるだけ精神的に扱ってくれると思います。

こんな暑い時やから、不養生すれば病気になるます。また秋口になれば一番病気が発生しやすい時だし、皆さん、健康に留意して暮らして下さい。できるだけ長生きするようにね。(文責・編集部)

特集 戦後71年……

小鹿島百周年

三重県四日市市 柳川 義雄
(FIWC関西委員会)

本年五月十七日、韓国のらい療養所国立小鹿島病院(以下小鹿島)が一九一七年創立後、百周年を迎え、記念行事が大々的に開催された。日本から来た沢知恵さんが聴衆の前で挨拶し、アカペラで歌った。その模様は山陽放送が一時間のドキュメンタリーを作るように楽しみにしている。

日本は一九〇九年の日韓併合により朝鮮を植民地とした。その時代に小鹿島は、日本の愛生園と同じような形、システムで日本政府の手で作られた。今は五百人位の在園者。しかし、戦時中の多い時は六千人以上が収容されていた。

文筆家で私たちの日韓合同ワークキャンプの常連だった故穴井典彦は、戦前、韓国の全羅南道の伐橋という町に暮らした。その頃、白衣の患者たちがトラックに乗せられ小鹿島に移送されるのを見たという。今でもソウルから小鹿島まではバスを乗り継いで七時間位かかる。

この小鹿島の戦前からの歴史については、故滝尾英二著の『朝鮮ハンセン病史』(未来社刊)に詳しいし、彼がソウルの図書館で、過去の新聞を一枚一枚閲覧して作った膨大な資料集が圧巻だ。植民地下の韓国では、日本のらい政策より過酷な隔離政策がとられた。

断種

一九八五年に私たちFIWC関西委員会と韓国忠南大助癩会は、全羅南道のハンドン農園で合同キャンプをした。そこには少し障害の重い老夫婦

が住んでおり彼らには子供がいなかった。小鹿島で断種の手術を受けたからだ。

二〇一四年にワークキャンプした慶尚南道のトソン村では、日本の植民地時代に小鹿島に収容され医療助手をしていたという女性がいた。彼女の仕事場の病棟に、結婚の噂のたった相手の男性が断種の手術のために、彼女に何の事前の話もなく運び込まれてきた。彼女は驚きのあまり自室にかえり泣き続けた。そんな彼女は、聞き書きをしている私が日本人であると判るや、「子孫を作れなくするなんてなんと残酷なことか」と堰を切ったように語り始めたのだった。

小鹿島には、現在、「検死室」というレンガ造りの当時の部屋が資料として保存されている。その部屋に掛けられた李東の詩は同じ男性としてぞくぞくさせられる。植民地であったがために日本本土よりもより厳しかった患者政策をうかがわせる。

李東の詩

『朝鮮ハンセン病史』より)

その昔 思春期に夢見た

愛の夢は 破れたり

今 この二十五の若さを

破滅させてゆく手術台の上で

わが青春を慟哭しつつ横たわる

将来 孫が見たいといった母の姿……

手術台の上にならつく

精管を絶つ冷たいメスが

わが局部に触れるとき……

砂粒のごと地に満ちてよとの

神の摂理に逆行するメスを見て

地上のヒポクラテス(古代ギリシャの医学者)

はきょうも慟哭する

李東は看護長の松を植え替えよとの命令にそむいて、罰として監禁室に入れられ出獄の翌日に断種の手術をされた。日本では結婚時に子供ができないように断種手術をした。しかし、小鹿島では職員に反抗的な者などに懲罰的に断種をしたのだ。

園長、周防正季の刺殺

一九四二年六月二十日のこと、当時、小鹿島更生園の園長だった周防正季が李春相イナフナサシに包丁で刺殺された。周防園長時代は、小鹿島を何千人も収容可能にする大拡張の時代だ。拡張工事に患者たちは強制的に動員された。また高台に園長の銅像が建てられ、患者たちは参拝を強要されていた。今、小鹿島には美しい日本庭園の公園がある。

その工事のため患者を大量動員し、近くの島から大岩を運搬させた。この病気の人たちが肉体力労働をするということは、自分の身を削り命までも落としかねない大変なことだ。その重労働の上で今の美しい公園があり、観光客たちが喜んで見に行っている。

島のある伝道師はこう言う。「公園に韓何雲ナムウソ（らい患者の詩人）の詩、ポリピリ（麦笛）が大岩に刻まれている。患者たちの血と汗と命でもって運ばれた岩に詩は刻まれるべきでない。」

小鹿島は一時、六千名以上を収容した。到底維持できない秩序を、戦争時代の植民地では強権断種、弾圧で保っていたのだ。

そんな中で周防園長は殺された。その時の事を、現場にいた小鹿島に八十年近く住んでいる金さんに聞いた。彼女は十歳の時に小鹿島に収容され、以来小鹿島を出ることなく暮らしてきた。視力を失い、両足を膝から下で失い、両手も手首から先がない。でも元気な声で日本語の歌をしっかりと

歌ってくれた。

李春相というその男は、女子学生で参拝のため頭を垂れている彼女の脇を、ゆっくりと歩いて通り抜け、不自由な手に縛りつけた包丁で園長を刺した。一説によると暴力的な佐藤看護主任を刺そうと思っていたら、佐藤がいなかったので園長を刺したという。彼はその後、死刑の宣告を受け八ヶ月後に処刑された。

その李春相を、韓国の英雄で伊藤博文を殺した安重根と同じような英雄として称えようという動きがある。

柳駿と定着村

その周防園長のもとに一人の韓国人医師がいた。その名も柳駿。彼は小鹿島に一九四一年に赴任し研究をしながら医師として勤務していた。翌年九州大学に留学し園長刺殺の現場にいなかった。その後、米国留学から帰国した柳駿はソウル近郊の共同墓地に群れるらい患者たちとつながり「定着村」(注)の運動にかかわっていく。

私は九十歳を越えた彼のソウルの自宅を何度も訪ねいろんな話を聞いた。彼の哲学は「私が楽しい、あなたが楽しい、そして皆が楽しい」だ。この順番が重要である。決して「皆のために」から始めない。日本では光田健輔が「国家のために」から出発したため、個人がより強くつぶされていったことを考えると、その反対の方向性を持つ「私↓あなた↓皆」という哲学が、日本に無い「定着村」へと結実したことは象徴的だ。

その定着村政策も、WHO世界保健機関からは批判されている。「快復者を集団で外に出したのではまた新たな差別が生まれる。あの町にもこの村にも快復者が住んでいるという姿を目指すべき

だ」と。確かに未だに周辺地域から「あの村」とか「農園」とかいう形で特別な地域と呼ばれている現実は残っている。

しかし、苦勞しながらも子供を産み育て社会に送り出していった姿を見るにつけ、日本社会が断種などでらい患者たちに子供を作らせず社会への架け橋も掛けずに、大勢が療養所内で一生を送らざるを得ない状況を作り出したことを考えると雲泥の差があると思う。

韓国は三十六年間という日本植民地時代の政策の影響から抜け出すのがとても重い課題だったようだ。日本政府の始めた断種の手術は八〇年代まで続いていたという。

昔の小鹿島に居た人たちの島のイメージは悪い。私たちの尊敬する故金新芽キムシンマさんは、一九九六年、FIWC関西主催のらい予防法廃止記念フォーラムに詩を寄せてくれたが、受け取りのため彼の住む定着村「忠光農園」を訪れた私に、急に声を大きくして「小鹿島には決して帰らない。一度復帰して社会に出てきたからには普通の一障害者として外で一生を終える」と強い決意を示した。

しかし結局、夫婦でお互いを支えあって生きてきた彼らは、夫人の身体の衰弱のために仕方なく小鹿島に移り住んだ。大田近郊という韓国の真ん中から遠い遠い南の果ての島にまた戻り、そこで二人とも一生を終えた。

私は彼の命日九月二十三日頃に毎年小鹿島を訪れ彼らの無念を思っている。彼は私がいに行くに必ず新しい誰かを紹介してくれた。その意思を継いで私は毎年小鹿島で新しい出会いを探している。

(注) 定着村・韓国は快復者の社会復帰のため百ヶ所位の村を作った。畜産業を中心に村は経済的に自立していった。

足あと
足あと

大倭への道、大倭からの道

神奈川県横浜市長 藤沢抱一

一、大倭への道

一九七四(昭和五九)年八月、大倭紫陽邑に居た。県立菅原園にボランティアで入った。

その前年八月から、川崎生まれ川崎育ちの私は司法修習の為、奈良に住んでいた。

司法修習生は、二年間の実務修習を行う前後各四ヶ月は東京で全員修習を行うが、一年四ヶ月は、各地方の裁判所に分散所属し修習をした。

四ヶ月ずつを、弁護、検察、刑事、民事の裁判実務を経験する。修習地は選択出来た。奈良を希望した。学生時代から、博物館横の日古館に泊って奈良を歩いており、住んでみたかった土地であった。

一九七四年七月、家庭裁判所の修習で、大倭紫陽花邑を訪れた。邑内にある菅原園、須加宮寮、長曾根寮の施設見学であった。家事事件、少年事件を扱う家庭裁判所の職務からは離れていると思

われるが、担当の安達裁判官が彼なりの意図と目的でそのカリキュラムを組んだものと思う。私は歓迎した。事案の処理技術はいつでも経験出来るが、そのような施設に関わることはそう多くはないことであつたからである。

順番に施設を見学し、最後に菅原園だった。園長(※編集部注 当時は次長、以降次長で。園長は法主さん)は矢追美寿紀さん、案内は岸田哲さんであった。説明を受けながら、私達一〇名位は園内の廊下を歩き、居室の中にも入れてもらった。



見学が終了してから違和感が残った。見学する方は、裁判を適切に行う為の研修という大義名分はあるが、見学される方は、寝て起きて、着換えをし、食事をし、排泄をし、共同生活を送っている生活の場に、無関係な第三者に入つて来られ見学されるのである。利用者がそういう一方的負担を強いられる理由はない、という思いがあり、借りが出来た感覚がその後も残った。

菅原園に入り、利用者の介助をすれば、見学でなく、施設及び利用者の実態も分かるのではないかと、利用者に対する借りを少しでも返せるのではないかとの思いに到った。園にボランティアの申し込みをし、美寿紀さんより「どうぞ」との返事をもらった。八月、二〇日間の夏期休暇の間菅原園に居た。

食事、入浴等の介助、利用者との交流、祭の準備、参加等をした。朝から夕方までフルに働いた。男性介助職員(※当時は指導員という職名。以降指導員で)は、岸田・中村孝美・須川映治さんが在籍していた。当初は通いのつもりであったが邑内にレリーフ工場がありその二階が空いており、宿泊可とのことだったのでそうした。同居人に、レリーフ工場に働いていた安藤勇・南要司・草場清則(通称みのる)さんが居た。同年代で気が合う交流を深めた。

ある朝事務室に行く、富増美恵子さんと次長が話をしていた。FIWCの韓国キャンプから帰国したとの報告と帰国が遅れたことのお詫びであった。FIWCの活動、むすびの家の存在、来歴を知った。

法主さん、鈴木さんと話す機会があつた。法主さんの「来た人が来ればいいし、去りたい者がいればそれもよし」「木にも、草にも、水、土、石にも、神が宿っている」の話が印象的だった。飯河四郎・梨貴夫妻と出会った。四郎さんは、大倭の月次祭の席でFIWCの学生の活動報告をした。その時初めて会ったが、法主さんと兄弟みたいな雰囲気の人と感じた。参加者は多士済済との印象。

ある日、営繕の熊田義見さんから言われ園の外周の草刈りをやった。炎天下、強情な背丈の高い草を手刈りしていた。かなり体力を消耗していた。そのことについて指導員の中村さんと熊田さんが議論をしていた。「介助ボランティアに入っているのであるから、介助の業務を割り当ててやるべきだ」「じゃ、誰が草刈りをやるのだ。園を維持するのに草刈りは必要だ」。双方の理屈は間違いない。真剣に議論してくれているのはありがたかった。

ボランティアは色々位置づけられると思うが、入った先に必要なことは何でもやる、ことというのが今の結論。

理髪の作業をしていた。利用者の男性が、モヒカン刈りを希望した。バリカンで最ん中を縦に残して刈り上げた。本人は喜んでいて、それを見た岸田さんは残りを刈り取り、坊主にした。

何も言わなかったが、「自分がそのヘアースタイルにしないのであれば、他人にもしない」ということかと悟った。

引きつけを起こした男の子が居た。あわてて大きな声で職員の人を呼んだ。駆けつけた職員は、「大きな声を出さない、他の利用者がビックリしてしまう」と一言。納得。

居心地が良く、夏休みが終わった後も、一一月

に奈良を去る迄、土日を利用して大倭紫陽邑へ通った。(※藤沢さんは、その後まもなく富増美恵子さんと結婚されており、紫陽花邑はその出会いの場ともなったのです！ 右頁の写真は最近の藤沢夫妻)

一、大倭からの道

一九七五年三月、司法修習が終了し、四月から弁護士業務を始めた。

直後から、水俣病裁判(認定不作為違法確認訴訟、百問港埋立処分禁止仮処分)、クロロキン網膜症薬害損害賠償請求事件を担当した。

認定不作為の違法確認訴訟は三人の弁護士で行ったが、その中の一人は崎間昌一郎さんだった。FIWCで活動し、むすびの家の建設にも携わった人だった。

一九八〇年、草場さんから刑事事件依頼があった。彼は大倭紫陽邑を出て、東京都日野市で建物防水の会社をやりながら障害者を雇用したり、その支援を行っていた。

地域に東京都七生福祉園という精神薄弱者更生施設があり、卒園生が窃盗事件で逮捕され弁護の依頼であった。一八才で卒園し就労するが、個人的にも社会的にもスムーズに生活を送れずトラブルを抱えることが多かった。施設の職員が、そのような卒園生たちを受け入れる為、小さな共同体を作っていた。家を四軒借り共同生活を送り、生活の場の中に卒園生が宿泊出来る家庭としての空間を用意していた。

草場はその職員達と交流していた。その利用者のS君とI君が逮捕された。告白していたが弁護士活動の結果無罪となった。

その過程で伊藤敷さんと会った。福祉施設の職

員で二人の支援者をしていった。岸田さんの昔からの友人とのこと。現在同地域に「認定NPO法人やまぼうし」を創設し、理事長として活動し、草場も理事としてサポートしている。

S君・I君の件は考えさせられた。同じ卒園生の友人の家に泊まりに行き、一万円を盗ったという事案であった。被害者は弱々しい子で、S君・I君はそれを上回っていた。泊まるころがないから強引に被害者の家に押し掛け泊めてもらった。二人が帰った後、警察に被害を届け出た。被害者は警察に介入してもらう為に、被害があったと訴え出たというのが真相だと思う。彼はS君・I君に泊まって欲しくなかった。しかし力関係で断れなかった。二度と来て欲しくないから警察を使ったのだと思われる。

それから間もなく卒園生のN君事件が起きた。伊藤さんから連絡があった。その時のN君は親と東京都足立区に住んで居た。酔って駐車中の車を壊して逮捕された。示談し釈放されたが、その場で現住建造物放火で再逮捕された。当時その地域で放火事件が何件か起こっていた。知的障害のあるN君に対し嫌疑をかけ、器物損壊の時に放火の取調もしていた。告白し放火した場所の地図、家の模式図、火を付けた場所を書いた図面がN君によって作成されていた。

伊藤さんをはじめとする都福祉局の職員らが警察署前で抗議活動を行った。N君は一日後に釈放された。現在は築炉メーカーで就労し、自立し生活している。

一九八五年二月、横浜市立小学校五年、杉本治君が団地から飛び降りて自死した。私は、当時市内小学校の教師の配転処分に対する取消訴訟を受任していた。指導要録に、評価せず斜線を記入したことが処分理由であった。少数の教師で組織さ

れた横浜学校労働者組合が、処分された教師の支援をしていた。

治君は、団地の壁に「マー先のバカ」と書いていた。担任の教師である。市教委は、十分な原因調査もせず、調査結果の発表も十分しなかった。両親は、十分な調査をし、原因を究明することが治君の為に、今後の教育の為に必要であるとして、市教委と交渉していた。横校労も私も行動を共にしていた。両親及び関係者で集会を持った。

野本三吉さんに会った。岸田さんの友人であり知己を得た。三吉さん、岸田さん、阿木幸男さんの主催する三人の会には、何度か参加し、三吉さんとの交流を深めた。

一九八九年二月川崎市内の繁華街のゲームセンターで強盗殺人事件が発生した。多摩地区の児童福祉施設、都立誠明学園出身のS君(当時二〇才)が逮捕された。園の職員の連絡で弁護士となった。本人は、警察、検察には告白していたが、私に対しては否認していた。支援者に草場、伊藤始め、I君S君事件の時支援に動いた七生福祉園の職員はじめ福祉局の職員が加わった。

一六年間の裁判の結果は有罪で無期懲役であった。現在再審の手続を進めている一方、仮釈放の手続も進めている。身柄引受人を含め、仮釈放の受け皿として、伊藤、草場が関与している「NPO法人やまぼうし」がなつてくれようとしている。

美恵子のFIWC関西委員会の仲間である木下邦男・真知子夫婦、南井弘次、沼田繁明は関東に居を移し活動を続け、交流している。私共の子供、寧都、真人は学生時代FIWC関西委員会の活動に関わり、大倭紫陽邑にお世話になった。真人は社会人になってもその活動は続けている。

「来たい人は来ればよい」というオープンな大倭に感謝。

あじさい日誌

7月11日 30年前法主さんの導きにより大倭神宮で挙式された大阪府城東区の松森俊尚さんが結婚30周年を期に、奥さんと息子・娘2人の一家で来邑し、神宮にもお参りされました。

7月15日 大倭神宮月次祭。

7月19日 午後、和歌山県有田郡旧金屋町の高垣昌子さんが来邑されました。

7月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から大倭会館で大倭会幹事会が開かれました。

8月1日 大倭病院設立20周年記念日。午前11時から大倭病院守護霊である東山坊大善神拝所において日頃の感謝と安全を祈願しました。

8月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。8月6日(午前8時15分広島)及び9日(午前11時2分長崎)原爆投下の時刻に、拜殿の大太鼓が李章根さんにより打ち鳴らされました。太鼓の聞こえた人はその場で各自、黙祷。

8月7日 午前8時から大倭墓地の大掃除が行われました。引き続き9時から午前中で終了を目標にして紫陽花邑の大掃除。大倭会有志の皆さんやF1WCのキャンパーも参加してくれました。猛暑の日々、復調？昇ちゃんが大掃除にもずつと顔を出していて驚きました。

8月8日 午後5時半から大倭会館において故友追憶賢さんの満中陰法要が行われました。ご親族はじめ友人知人の皆さん、

現場作業を終えられてすぐの大倭殖産株式会社全社員さんや大倭病院の職員さん、大倭会の方達、紫陽花邑邑人、百名近くが参拝されました。



大倭安宿宛では

7月30日 第40回大倭安宿苑夏祭り、午後3時〜6時半。暑い中でしたが大勢の皆さんに来て頂き、模擬店や盆踊り、カラオケ等で夏祭りの雰囲気を楽しみ、無事故で終了することが出来ました。

(菅原園)

7月26・29日 4名が大阪のアートアクアリウム展へ。アート化された金魚が美しく壮大！(須加宮寮)

7月26日 季節の歌や演奏により音楽療法を行いました。(長曾根寮)

7月20日 (デイ) 民踊ボランティア。踊り方も教えてくれ、一緒に踊って楽しめました。

7月30日 (特養) 普段、あまり食べない方も、夏祭りの模擬店の食べ物を喜んでいました。

(茂毛路園) 7月20日 9名のボランティアの皆様の手ンドベル演奏。

(八重垣園) 7月25日 2年前に作った梅酒を昼食時に準備しました。

表紙絵について

鹿兒島県熊毛郡屋久島町 一湊白川山 手塚田津子

今、私の目の前にある3つのもの。「桃」、手に取るとずしりとして、甘いかおりと美しい色。昨年産まれた私の孫、「琉琉」は、まだひとりでは歩くこともできないけれども、その一挙一動から目が離せない。「琉球藍」は藍色をかもし出す植物として栽培されてきたが、藍の原料として使われても使われなくても、毎年葉を茂らせ、脈々と生きている。

3つとも、その生命力に迷いが無い。あるがままに輝く生命を感じながら描きました。

こぼれずみ

グレートジャーニーと

関野吉晴さんのこと

東京都墨田区 岡部宏代

人類は6万年をかけて世界中に拡散した。この旅をグレートジャーニー(GJ)という。関野吉晴さんは10年かけてGJを辿る旅にでた。その映像を何度も見て元気を頂き、私も触発されて放送大学で学ぶ事にした。

GJを達成した時、講演会に行くが3回とも満席で入れず。そんな頃高校の同期会で「関野君を祝う会」の通知が届いた。まさか同級生とは。

学生時代の私は人見知りが強いく沢山の人の中にいるのは苦手だったが珍しく足を運んだ。会場の受付で関野さんは笑顔で「ようこそ」と声をかけてくれた。武蔵野美術大学で文化人類学を教えている関野さんの授業に聴講生として通うようになる。世界中の人々は、それぞれの環境の中で生まれた価値観や常識、慣習を身にやどして暮らしている事を知る。私は井の中の蛙だという事を痛感した。「僕は聴いてくれる人がいたら何処でも行きます」と言った関野さんの言葉に甘えて大倭の文化講演会をお願いした。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

9月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第572回祝会 9月11日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮) 9月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 9月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第332回大倭会文化行事

秋の旅行のご案内

一瀬戸内海の多島美・歴史を訪ねる一

日にち 平成28年10月30日(日)・31日(月)

行き先 瀬戸内海巡り

高松・栗林公園・大島青松園・直島(瀬戸内芸術祭)

宿泊 花樹海(高松)

費用 約3万1千円

問合せ 湯浅芳郎

携帯090-6987-5847